

# 編集部は今月この**1**冊

『放哉と山頭火 死を生きる』

渡辺利夫

咳をしても一人

分け入つても分け入つても青い山

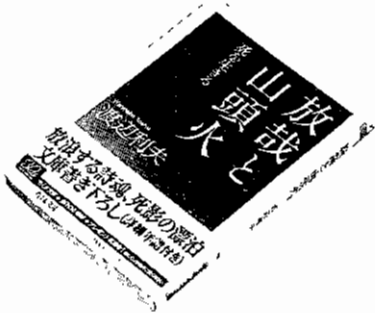
尾崎放哉と種田山頭火の代表句を

知っている人は多いだろうが、その

生涯となると、知っている人はそれ

ほど多くないだろう。

学歴エリートから転げ落ち、病氣



ちくま文庫 864円(税込)  
どうしても飲んでしまう酒は恐ろしい。逆に、酒がなければ彼らはいなかったとも言えるかもしれないが。

を抱えながら各地を転々とし、ようやく小豆島の小屋に辿り着いた放哉。自殺した母の面影を引きずりながら、ただひたすらに歩き続けた山頭火。

共通するのは、自分勝手な性格で周りに迷惑ばかりをかけ、酒と孤独をひたすら求め続けながら、自由律句という表現に身を捧げたことである。振り回される周りの人たちはたまったものではない。特に妻は大変だったろうが、こういう生き方だからこそ、人間の業のありようを表現できたのかもしれない。

アジア研究の第一人者が、生き方／死に方から彼らの思想を端正な筆致で描き、挟まれる彼らの句の哀切さ、孤独や寂寥が心に沁みてくる。